

アラビア半島の遊牧化

—ワディ・グバイ遺跡群の第3～4次発掘調査(2018年)—

藤井 純夫 金沢大学歴史言語文化学系教授
足立 拓朗 金沢大学歴史言語文化学系教授

Pastoral Nomadization in the Arabian Peninsula: Excavations at the Wadi Ghubai Sites, 2018

FUJII, Sumio Research Professor, Institute of Human and Social Sciences, Kanazawa University
ADACHI, Takuro Professor, Institute of Human and Social Sciences, Kanazawa University

アラビア半島の遊牧化—ワディ・グバイ遺跡群の第3～4次発掘調査(2018年)—

1. はじめに

アラビア半島北西部の遊牧化過程を追跡するジョウフ・タブーク調査計画(JTAP: Jawf/Tabuk Archaeological Project)は、4年間にわたるワディ・シャルマ地区での活動を終え(藤井・足立 2015; 藤井他 2016、

2017; Fujii 2018; Fujii, Adachi *et al.* 2018; Fujii, al-Mansoor *et al.* 2018, in print)、州都タブークの北約50 kmに位置するグレイヤ平原に調査区を移した(図1)。移動当初の2017年は、3月にワディ・ムハラック2号遺跡(Wadi Muharak 2)を、12月に同1号遺跡およびワディ・グバイ5～4号遺跡(Wadi Ghubai

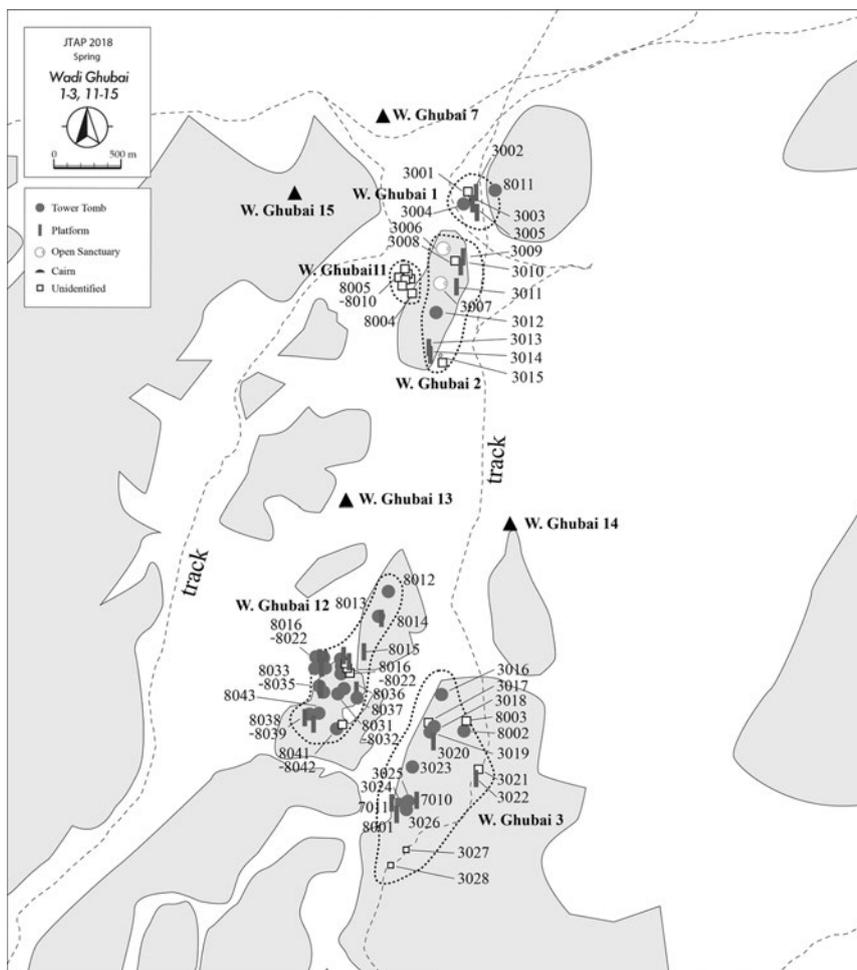


図1 ワディ・グバイ地区の遺跡分布図



図2 ワディ・グバイ 3号遺跡：3019号石柱式円塔墓(南から)



図4 ワディ・グバイ 1号遺跡：3003号片面プラットフォーム(南東から)

5-4)を、それぞれ発掘した(藤井他 2018; Fujii 2016)。いずれも、銅石器時代～前期青銅器時代遊牧民の各種葬祭遺構が混在する複合遺跡である。2018年は、3月にワディ・グバイ 3～1号遺跡を、12月に同6S、11、13、14、16号遺跡およびサフワン 1号遺跡(Safwan 1)を、発掘した。多くは昨年までの調査の補足であるが、一部に後期新石器時代集落・擬集落の新規調査を含む。以下、調査順に紹介する。

2. ワディ・グバイ 3～1号遺跡 (銅石器時代～前期青銅器時代)

3号遺跡はワディ・グバイの東側河岸段丘上に位置し、10数基の石積み祭祀遺構から成る。昨年の第2次調査では、遺跡南端の円塔墓2基と方塔墓1基を発掘した。今季は残る遺構のうち円塔墓3基、プラットフォーム3基、楕円形遺構1基を、それぞれ発掘した。各遺構の特徴については、昨年度の報告を参照されたい。なお、この遺跡の円塔墓は、墓室中央に積み上げ式の石柱を伴うタイプであった(図2)。

2号遺跡は3号遺跡の北約3kmの緩斜面上に位置



図3 ワディ・グバイ 2号遺跡：3013号短縮型プラットフォーム(南東から)

し、計10基の遺構を含む。エンクロージャー2基、円塔墓1基、プラットフォーム5基、楕円形遺構1基を発掘した。円塔墓はやはり積み上げ式の石柱を伴っており、これによって同心円状に配置された屋根石を支えていた。特筆すべきは、両翼が退化し、中央ニッチ部分だけに圧縮された末期型プラットフォームを新たに確認したことである(図3)。床面中央奥には、礼拝対象となる1～2本の立石が組み込まれていた。

1号遺跡は、2号遺跡の北北東約300mのワディ河床に位置する。登録された6基の遺構のうち、円塔墓2基、プラットフォーム2基を発掘した。前者のうちの1基は、他の円塔墓と異なり独立丘の縁辺にあって、ワディ面を見下ろしていた。また、後者のうちの1基は片面タイプで、壁面前方(東側)に2列の立石列を伴っていた(図4)。

3. ワディ・グバイ 11号遺跡 (後期新石器時代～銅石器時代)

11号遺跡は、ワディ・グバイ 2号遺跡の西側斜面上に位置する小型の複合遺跡で、単独または連結型の楕円形住居遺構5基、「擬集落」1件、その他小遺構2基から成る。遺跡南端に位置する8010号連結楕円形住居遺構のトレンチ発掘では、この地域の後期新石器～銅石器時代建築に特有の斜め積み壁面を確認した(図5)。遺跡中央付近の8005号単独楕円形住居遺構でも、同様の壁面を確認した。二つの遺構は緩斜面を掘り込んで建築されており、その壁面は斜面上半では半地下式の擁壁、斜面下半では地上式となっていた。なお、半地下部分では、掘込み面と石積み壁との隙間に屑石を充填していた。両遺構共に遺物はなかったが、前者からは後期新石器時代末～銅石器時代初頭の



図5 ワディ・グバイ 11号遺跡：8010号斜め積み連結楕円形住居遺構(北西から)



図6 ワディ・グバイ 11号遺跡：擬集落南端の8008号遺構(東から)



図7 ワディ・グバイ 13号遺跡：擬集落南西端の8052号住居遺構(南西から)



図8 ワディ・グバイ 14号遺跡：8071号斜め積み楕円形住居遺構(南東から)

C-14年代を得ている。後者のそれは測定中であるが、石積み技法の共通性から見て、ほぼ同時期と考えられる。

一方、「擬集落」は、レヴァント南部周辺乾燥域の後期新石器文化に特徴的な(集落の形態を模した)祭祀施設である(Fujii 2013, 2016)。生活の痕跡をまったく伴わない矩形の住居(すなわち擬住居)が横方向に連結し、その前壁沿いに小型の環状遺構を伴う。11号遺跡の場合、擬住居と小型環状遺構が一对となった典型的な擬集落部分(8008号遺構)(図6)と、(擬住居を伴わない)小型環状遺構だけの列(8044号遺構)の二つが、約15mの間隔を置いて北北東から南南西に連なっていた。後者は擬集落の退化形・簡略形と考えられる。層位的に見て、この擬集落とこれに隣接する楕円形遺構群はほぼ同時期と考えられる。

4. ワディ・グバイ 13号遺跡 (後期新石器時代～銅石器時代)

13号遺跡は11号遺跡の南約3kmのワディ岸に位

置し、単独または連結型の楕円形遺構3基、擬集落1件、その他遺構数基から成る。擬集落は全長約210mで、11号遺跡同様に、矩形擬住居と小型環状遺構の組み合わせ部分と、小型環状遺構列とが北東～南西方向に連なっていた。南西端の擬住居中央床面からは、東面する大小5個の立石が確認された(図7)。末期型擬集落と立石の組み合わせは、後期新石器時代の擬集落儀礼(祖先崇拜)が銅石器時代後半以降の立石儀礼(精霊崇拜?)へと推移する段階の折衷様式と考えられる。なお、北東端の擬住居は盗掘されており、立石の有無は確認できなかった。

5. ワディ・グバイ 14号遺跡 (後期新石器時代～銅石器時代)

14号遺跡は、13号遺跡の東約1kmの崖裾に位置し、大型楕円形遺構4基を含む計10基の石造遺構から成る。うち1基(8071号遺構)を発掘し、典型的な斜め積み壁面を確認した(図8)。遺物は無かった。



図9 ワディ・グバイ 16号遺跡：8058号周壁付き円塔墓（北西上空から）



図11 サフワーン1号遺跡：床面立石群を伴う斜め積みエンクロージャー（西から）

6. ワディ・グバイ 16号遺跡 （銅石器時代～前期青銅器時代）

小型のワディを挟んで13号遺跡の南側に位置し、円塔墓3基、片面プラットフォーム1基、楕円形住居遺構2基を含む。円塔墓のうちの1基を清掃発掘したところ、積み上げ式の石柱と楕円形の周壁を伴うことが判明した(図9)。

7. ワディ・グバイ 6S号遺跡 （銅石器時代～前期青銅器時代）

中～後期青銅器時代の都市遺跡グレイヤ(Qurayya)の南約3kmのワディ東岸緩斜面上に位置する小型遺跡。ニッチ付きエンクロージャー1基と短縮型プラットフォーム1基を調査し、それぞれのニッチ中央部分で数本の立石を確認した。前者の場合、ニッチ前方にも計9本の小型立石列があった(図10)。なお、最南端のワディ・ムハラック2号遺跡から全長約11kmにわたって断続的に延びる葬祭遺跡群は、この6S号



図10 ワディ・グバイ 6S号遺跡：8076号ニッチ付きエンクロージャーの中核部（北東から）

遺跡を北端とする。ワディ・グバイの西岸でも数件の同時代祭祀遺跡を確認しているが、すでに十分なデータを得ているため、調査は見送った。

8. サフワーン1号遺跡(銅石器時代)

代わって調査したのが、グレイヤ平原から北東に約40km離れた小丘陵上に位置するサフワーン1号遺跡である。30数基の石造遺構の中では、エンクロージャーが大半を占める。うち2基を調査した結果、斜め積みの壁面を持ち、床面に十数本の立石を伴っていることが判明した(図11)。本遺構は、銅石器時代後半に盛行したニッチ付きエンクロージャーの先行形態と考えられる。近隣のサフワーン2号遺跡でも、その類例を確認した。なお、両遺跡から南に約10km離れたハマダ・シャロウラ遺跡(Hamada Sharawra)では、両型式の中間となる斜め積み壁面のニッチ付きエンクロージャーを4基確認した。

9. まとめ

ワディ・ムハラック、ワディ・グバイ遺跡群の調査目的は、北西アラビアにおける銅石器～前期青銅器時代の墓制編年を構築することにあつた。その成果については、前回示した通りである(藤井他 2018、図11)。今年度の調査では、プラットフォームの最終形態であるコの字型遺構を追加確認すると共に、後期新石器時代末の集落とこれに伴う擬集落を新たに確認した。中でも重要なのが、擬住居内部に立石を組み込んだワディ・グバイ13号遺跡8052号擬住居と、ニッチが未発達で床面中央に立石群を伴うサフワーン1号遺跡型エンクロージャーの発見である。こうした新発見によって、後期新石器時代の擬集落信仰から前期青銅器

時代の立石信仰への推移を、連続して捉えることが可能となった。

ワディ・ムハラック、ワディ・グバイ遺跡群の調査は、4回目の今季をもって一段落した。次年度は、グレイヤ平原の西約60kmのローズ山東山麓に位置する先土器新石器Bの集落遺跡、ムサイウィーン(Mu-sayyin)の発掘に着手する予定である。ワディ・シャルマ地区と同様に、グレイヤ地区でも新石器時代から前期青銅器時代までの編年を構築し、遊牧化の過程を明らかにしたい。

■参考文献

- ・藤井純夫・足立拓朗・長屋慶憲(2018)「アラビア半島の遊牧化—ワディ・ムハラック、ワディ・グバイ遺跡群の第1~2次発掘調査(2017年)」日本西アジア考古学会編『第25回西アジア発掘調査報告会報告集』122-127.
- ・藤井純夫・足立拓朗・長屋慶憲(2017)「アラビア半島の遊牧化—ワディ・シャルマ地区円塔墓遺跡群の分布・発掘調査(2016年)」日本西アジア考古学会編『第24回西アジア発掘調査報告会報告集』142-147.
- ・藤井純夫・足立拓朗・長屋慶憲(2016)「アラビア半島の遊牧化過程—ワディ・シャルマ1号遺跡の第4次発掘調査(2015)」西アジア考古学会編『第23回西アジア発掘調査報告会報告集』108-113.
- ・藤井純夫・足立拓朗(2015)「アラビア半島の遊牧化過程—ワディ・シャルマ1号遺跡の第2~3次発掘調査(2014)」西アジア考古学会編『第22回西アジア発掘調査報告会報告集』54-59.
- ・Fujii, S. (2018) Bridging the enclosure and the tower tomb: New insight from the Wadi Sharma Sites, NW Arabia. *Proceedings of Seminar for Arabian Studies* 48: 83-98.
- ・Fujii, S. (2016) Wadi Ghubai and Wadi Mohorak Sites: Protohistoric burial fields in the Tabuk Province, northwestern Arabia, in M. Luciani (ed.), *The Archaeology of North Arabia: Oases and Landscapes*, pp. 111-131. (OREA Series 4) Vienna: Austrian Academy of Sciences.
- ・Fujii, S. (2016) Slab-lined feline representations: New finding at 'Awja 1, a Late Neolithic open-air sanctuary in southernmost Jordan. In: R. S. Stucky, O. Kaelin, and H-P. Mathys (eds.), *Proceedings of the 9th International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East*, vol.3: 549-559. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.
- ・Fujii, S. (2013) Chronology of the Jafr prehistory and protohistory: A key to the process of pastoral nomadization in the southern Levant. *Syria* 90: 49-125.
- ・Fujii, S., Adachi, T., al-Mansoor, A. A., al-Jhani, R., and al-Muwaykel, A. (2018) Jawf/Tabuk archaeological project, 2012-2013: Preliminary report of the Saudi-Japan joint surveys in the Tabuk Province. *Atlat - Journal of Saudi Arabian Archaeology* 25: 181-189.
- ・Fujii, S., al-Mansoor, A. A., Adachi, T., al-Khalifa, K. A., Nagaya, K., al-Anazi, A. S. (2018) A preliminary excavation report of Wadi Sharma 1, a Neolithic settlement in the Tabuk Province (2012-2012). *Atlat - Journal of Saudi Arabian Archaeology* 26: 116-124.
- ・Fujii, S., al-Mansoor, A. A., Adachi, T., al-Khalifa, K. A., and Nagaya, K. (in print) Excavations at Wadi Sharma 1: New Insights into the Hejaz Neolithic, Northwestern Arabia. Luciani, M. (ed.), *The Archaeology of the Arabian Peninsula: Connecting the Evidence*. OREA Series 4. Vienna: Austrian Academy of Sciences.